

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## シンポジウムの成果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北方文化振興協会 公開日: 2017-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008509">http://hdl.handle.net/10502/00008509</a>

## シンポジウムの成果

岸上 伸啓  
国立民族学博物館

### Results of the Symposium

Nobuhiro KISHIGAMI  
National Museum of Ethnology

本シンポジウムでは、環境変化と先住民の生業文化に関する8つの報告があった。最後にそれぞれの報告について要約し、それをもとに今回のシンポジウムから得られた知見について総括してみたい。

#### (1) 北方冷水域の海洋生態系—生態系と北方民族文化に対する温暖化の影響— (谷口 旭)

海表面の冷却によって海水が上下混合する北方海域は、栄養分に満ちた豊かな海である。この環境が北方先住民の生業の基盤を形成してきた。地球温暖化によって冬季の海表面冷却が弱まれば、この海域の生物生産量が低下する可能性があるが、こうした変化は北方地域に暮らす先住民の生活や文化に影響すると考えられる。

#### (2) 北極海と気候変動 資源と領海、そして先住民をめぐる紛争 (スチュアート ヘンリ)

北極海とその周辺地域を対象に、地球温暖化の影響が社会的・経済的に一様ではなく、それを一元化して語るのは危険であることを示している。たとえば、グリーンランドの北部や東部では、地球温暖化が狩猟活動に悪影響を及ぼしているため否定的な評価が下されているが、南部では、農耕、牧畜、水力発電、資源開発などに関して肯定的な評価が存在している。

#### (3) Prehistoric Inuit Responses to Changes in the Marine Environment in the Canadian Arctic (James M. SAVELLE and Arthur S. DYKE)

現在、地球温暖化の影響が問題になっているが、極北地域における人類の4700年の歴史のなかでも温暖化や寒冷化があり、その都度、人口の増減といった変化が繰り返されてきた。人類は、生活様式の修正や移動によって環境変化に適応してきた歴史をもつ。巨視的な時間の流れで地球温暖化の問題を考えることが重要である。

#### (4) 千島列島への移住と適応 (手塚 薫)

千島列島全域を対象とした国際調査の成果から、千島列島への人間の移住と適応について検討している。島という特殊な環境への適応を、千島列島特有の環境要因、先史時代における生存に必要な資源の確保といった側面とともに、他地域との交易など東アジアの政治経済学的変化への対応として捉える視点の重要性を示す事例を提供している。

#### (5) Seal Hunting in the Little Sea Region of Lake Baikal, Siberia (Tatiana NOMOKONOVA and Robert J. LOSEY)

シベリアの巨大な湖・バイカル湖に生息するバイカルアザラシは、約9000年前から湖周辺に住む諸民族によって食料として利用されてきた。アザラシの繁殖や生存にとって湖の凍結は重要だが、地球温暖化による凍結の不安定化は、アザラシだけでなく、アザラシを捕獲するために氷上を移動するハンターにとっても深刻な脅威となっている。

(6) 生存の条件：オートポエシス・システムとしてのイヌイトの生業システム（大村敬一）

動物と人間の関係に関する独自の世界観のもとに実践される生業システム（捕獲や分配、消費）が再生産される限り、イヌイト社会は再生産されていくと主張し、その存続条件を1) 野生生物へのアクセス、2) 食物の分ち合い、3) 野生生物に対する劣位性、4) 自由（決定権）の確保の4点であるとする。この条件が正しいとすれば、温暖化が条件1)、2) に負の影響を及ぼせば、イヌイト社会が大きく変わる可能性を示唆している。

(7) カムチャツカ先住民の海洋資源の利用—チギリ地区南部沿岸における地理的特徴と歴史的变化—（渡部 裕）

1930～1960年代初頭にかけてのカムチャツカ半島沿岸における先住民の海獣利用の変化について報告している。海獣類は、そり犬の餌などとして利用されてきたが、1950年代後半のスノーモービル導入に伴う犬ぞりの減少により、犬の餌としての役割は低下した。環境変化とともに政治経済的变化が海洋資源の利用に変化をもたらしたことが示されている。

(8) アラスカ先住民による漁撈活動と気候変動の関係：ユーコン＝クスクウィムデルタの事例検討（久保田 亮）

アラスカ南西部における地球温暖化の影響について、チュピックの漁労活動を事例に紹介している。チュピックは、季節ごとに異なる場所でさまざまな魚種を対象に漁労をおこなっている。地球温暖化は、彼らの漁労活動に影響を及ぼしてはいるが、現時点でその生活様式を根底から覆すような事態には至っていない。

以上のように、環境変化と先住民の生業文化について生態環境に関する報告、考古学的な数千年の時間スケールに関する報告、歴史的な過程に関する報告、現在の状況に関する報告が行われた。今回の報告を総合すれば、いくつかの共通の結論を得ることができると考える。

第1は、北方の冷たい海は豊かな海であるが、地球温暖化によってその海に悪影響が及ぼされ、そこに生息する動物やそれを利用する人間に悪影響が出る可能性があることである。

第2は、カナダ極北地域においてもシベリアにおいても、温暖化や寒冷化が過去に何度か繰り返され、その結果、地域人口の増加や減少といった変化が見られたことである。しかし、このような変化にもかかわらず、人類は極北地域に生息する動物資源を利用しながら、または移動しながら、生き延びてきたのである。

第3は、現在、地球温暖化による極北地域への悪影響が喧伝されているが、その環境への影響は決して一様ではないと言う事実である。立場によっては、地球温暖化は肯定的もしくは否定的に評価されるという点を忘れてはならないと考える。

第4に、社会が再生産するためにはいくつかの条件が考えられるが、地球温暖化がその条件を損なう場合には、大きな社会変化が起きる可能性があるということである。このことは、逆に地球温暖化が進んでも、条件が満たされさえすれば、社会が再生産されることを意味している。

第5は、極北地域では環境要因や環境変化が人間の活動や社会を大きく規定する要因と考えられがちだが、考古学的研究や歴史学的研究は、環境要因とともに、国家や交易、環境運動など政治・経済的要因が重要であることを示しているという点である。

こうした共通の結論から、北方諸文化の研究は、環境要因や外部社会との政治・経済的な関係に考慮しながら、各民族の歴史や社会、生業活動、世界観をより深く理解することによって、さらに発展すると考えられる。